

田氏と村上氏は共に叫び聲一つ残さず、風のやうに五百米直下のカラ澤に轉落して行つた。

三番目の阪東氏が、前の二者よりも後方約三米、斜め左方に位置してゐたことは、まことに天祐のそれであつた。二人はかうして、阪東氏のすぐ右手から消え去つた。が、岩壁の登攀は、原則として登りよりも下りの方が難しい。いま有能な二先者を失つた氏に、どうして困難な後退が策し得られよう。かと云つて、ここで自殺的な盲擧に出て終へば、誰がこれ迄の苦闘と、二者墜落の現況を本部へ報告し得るか。茫然と、半ば夢心地で、阪東氏は最前の第一悪場上まで下つてきた。と、そこについ今し方まで、友村上氏の肩にあつた一本のザイルが、輪形のまま草つきの小さな岩に引掛つてゐる。天の祐け、友の救ひと、氏はそのザイルを捨綱として、懸命の率垂下降にとりかかつたのであつた。

三、雷 撃

海を越えた外國の實例に、必ずしもこだはる必要はさらさらないが、歐羅巴アルプス登山史上には、しばしば山頂における雷撃の遭難が繰返されてゐる。たとへば大正九年の七月、有名な楨有恒氏がアイガーの東山稜に、歴史的な完登録を作つたとき、挺身してこの登攀を援けた四人のガイドのうちの一人、最も遅しかつた山男ブラヴァンドは、實にその父親をヴェツタアホルン

の頂きで雷のために失ひ、この男自身も數年ののち、同じ山を案内してゐて同行者と共に雷に打たれて死んでゐる。氣象的には、世界有數の惡氣流國と云はれる日本には、不思議と、この種の特殊な山の遭難に乏しかつた。

と、云つてもこれが決して、絶無であつたのではない。昭和四年の七月、例の中房温泉から燕大天井、槍のコースをやらうとして出發した愛知縣立安城高等女學校登山隊（約二十名）が、燕岳の手前、合戰澤の樹林帯をぬけた地點で、猛烈な雷雨に遭ひ、三年生の大森きよ子さんといふ一生徒が、雷氣を感じて昏倒した。このお嬢さんには、幸ひと立派な附添人がゐた。それが實のお父様で、前愛知縣立安城農學校の校長さんといふ月書を持つ、大森謹平氏（五十三歳）である。倒れた娘さんを早速ながら抱き起して、介抱してゐる最中にまた猛烈な雷鳴があつて、今度は介抱者のお父さんが倒れ、十七八歳のお嬢さんよりも、五十三歳の父上の方が抵抗力も弱かつたのか、間もなく、娘さんは無事でお父さんが心臓麻痺で亡くなつた。

越えて昭和九年の八月、これは地元長野縣下伊那郡松尾村の青年登山隊員（約十名）が、今でいふ夏期鍊成の爲に、郷村にほど近い安平路山（木曾駒ヶ岳より南下する、いはゆる中央アルプス連峰の突端に屹立する一雄峰、二、三三三米もあつてなかなか高い）に登り、天幕を張つて折柄の雷雨を避けてゐる時、一團員の青木節夫氏（二十一歳）が、何かの事でひよつと身體を天幕

の外へ出した途端、ぴかぴか一つと来てこれに感電、即死を遂げてゐる。新聞紙が簡単に報道してゐたところによると、この時の雷撃は一度ぴかぴか一つと来て、それつきりであとは直ぐ止んで終つたといふ。よくよく、不運な遭難者と稱するほかはない。

いま一つ、これは北九州の盛んなる炭坑地方、正しくは糟屋炭田地内の寶満山北方、八木越（福岡市から篠栗町を経て、筑豊炭坑の中心地飯塚市に達する、ほぼ中間の一峠、高度は二九八米）附近で、福岡縣直方市在住の人後藤某、吉川某（年齢不詳）が、昭和十三年の八月、やはり不慮の落雷に會つて横死を遂げてゐるが、これは登山者の雷死といふよりも、旅行者が、三百米そこそこの丘陵地帯を歩いてゐて、或ひは、平野の歩行中にもたまたま出逢ふかも知れぬ、突然の雷撃を受けたと見るのが本當であらう。やや嚴密なる範疇において、登山者の雷死といへば、前掲燕岳の合戦澤と伊那の安平路山の二件にとどめをさしてゐた。

ところが、ここに昭和十四年七月十六日の午後四時きつかりといふ時刻に至つて、われわれは正真正正命、申分のない高度をもつ峻嶺の絶頂近くにおいて、典型的とも稱すべき雷死の實相を目撃するに及んで、「わが國には、一流級高山での雷撃による遭難はない」といふ一つの斷定を、根本から思ひ改めねばならなくなつた。新らしい型の遭難の勃發に、ただ愕然と恐懼するのが能ではない。勿論この悼むべき事實の爲に、一般登山者の登高意識が冷却するなどといふ事が、あつ

ていい筈のものでもない。いつかは起り得べき事柄が、登山史において比較的遅れてきたことを祝すると共に、その實相を冷静に直視して、將來、萬一の場合に遭遇しても、「事に善處」する心構へを持たねばならぬと痛感する。

ともかく、記述を急ぐとしよう。それはその年（昭和十四年）の七月中旬、中央線の列車を辰野驛で伊那電車に乗りかへ、元氣よく白峰北岳を目ざして進發した、神戸高商山岳部員、合はせて十三名の行手に待ち伏せしてゐた事件である。一行十三名は伊那入船で二班に分れた。すなはち一隊は、その行の總指揮官の位置にゐた高商三年の松村守夫氏をリーダーとする九名、これは戸臺から北澤小屋、兩俣小屋を経て目的の大樺小屋へ。また他の一隊は、リーダーに同じく三年の梶金之助氏を頂く四名、別働隊だから行路もやや難しく、鹿鹽から三伏峠を越え、逆に鹽見、東俣、廣河内、農鳥岳と強行して、同じく大樺小屋へ全員合流する計畫が立ててあつた。

その計畫は遲滞なく實現され、松村リーダーの本隊九名、すなはち副隊長の佐野隆一氏（三年）に中村孝一氏、橋本棟一氏（以上二年）と、朝田武彦、松田幸次郎、坂田秀治、伊藤孝作、畑稔氏（以上一年）は、登高第二日（七月十三日）に、例の仙丈岳頂上から、大仙丈、菱平の道中に時間を喰ひ、午後八時にやうやく兩俣小屋入りをするやうな苦勞もしたけれど、次の十四日には午後三時には早くも小太郎尾根に着き、草みちを一般に駈けくだつて、四時には目標の大樺小屋

に安着した。ここ迄は、何しろ初年生も多いことだから、充分に大事をとつて、戸臺の人夫三名を同伴した。が、もう人夫諸君には大して用はない。そこで、竹澤一一君だけを残して、あとは戸臺へ返すこととした。

明くれば七月の十五日、お天気も有難いことに悪くない。荷物の整理を一應終つてから、豫定通りゆけば入船で袂を分つた第二別働隊（前記のやうに、行路もやや困難と見られるので、これにはリーダー梶氏以下中川利民氏（三年）に、長谷川光郎、宮田良治氏（以上二年）と、相當の経験者のみを選んで編成した）四氏に會へるかも知れぬ希望もあつたので、午前十一時十五分、伊藤、畑、松田、坂田の四新兵を小屋に残し、松村、佐野、中村、橋本、朝田の五氏して、ともかく第一回の北岳登山を企て、午後二時十五分には、事なく標高三、一九二米コンマの四、富士山を除けば本州隨一の高嶺に到着して、そこに午後四時まで、別働隊を待ちつつ留まつた。

だがその待ち人たる梶氏、中川氏たちは、途中鹽見や廣河内で豫定よりも時間を喰ひ、その日の午後七時にやうやく農鳥小屋入りをした次第で、無論待てど暮せど、それは脊待草の唄の文句に等しかつた。かうして明けたのが問題の十六日、相變らずの晴天に今度は朝もやや早く、八時二十分に副隊長の佐野氏が、前日の待機部員伊藤、畑、坂田、松田氏を伴つて北岳登山に出發、その留守中に、主將松村氏と、中村、橋本、朝田の四氏が、午後零時三十分、小屋には人夫竹澤

君一人を残して、かねての豫定通り前日の小太郎道とは別な大樺澤を溯行して、夏の北岳には名物行事のバツトレス偵察に出發した。

大雪溪下に出たのが午後二時、バツトレス直下に達したのが二時四十分、霧が相當深かつたので、一時はここ迄で引返さうとも考へたけれど、前日も午後四時まで、北岳の頂上にゐた位だから、勿論何事も起らう筈はない。更に頑張つて岩場を這ひ、午後三時三十分目標の釣尾根に着く。信州側は半晴、甲州側は曇天、大樺澤は霧、富士もよく見え、ただ間の岳方面に一團の黒雲があり、ここで初めて「その間の岳方面にごろごろといふ、幽かな遠雷の音」を聞く。だが、そんな遠雷の音が何だらう。これは、松村氏自身がすでに山で、幾度も耳にした音ではないか。小憩のち前進開始、稜線づたひに北岳頂上へと立ち向ふ。

先頭松村、二番朝田、三番中村、後尾橋本氏の順、めいめいの間隔は恰度二米前後、さうして北岳の頂上より南側、約二十米ばかりの堅固な岩盤上に達したとき、時間にして午後四時、突如「猛烈なる閃光と共に、全員地上に叩き」つけられ、先頭松村氏はその瞬間「相當大きな岩石の飛散する」のを見、後尾の橋本氏は「腹部から下肢にかけ、かなりの強さの電流を」感じ、この両者が語る共通の感想には「二三秒間も全身がしびれ、なほ強列なる煙硝の匂ひを感じて、思はず激しい頭痛を覚え」たといふ。

後尾橋本氏より二米先の中村氏は、歩行の體勢とは逆に、頭を南方に、顔面は紫色、頭髮も赤味を帯びたまゝ、俯伏せになつて既に事切れてゐたし、先頭松村氏より二米後方にあつた朝田氏は、殊に前上齒に四枚、奥齒に二枚の金齒をはめてゐたせゐもあつたか、雷撃を受けた現状よりも西側に、十米の餘も撥ね飛ばされ、頭部に長さ一寸、幅四分ほどの穴があき、左の足裏にまで十文字の燒痕があり、着衣も殆どワイシャツの上部を残すのみで、慘澹たる遺骸となつてゐた。しかもその觸雷地點には南北約一米半、東西約二米、深さ約半米の物凄い大穴があげられてあつたといふ。のちに神戸から駆けつけて、大いに奔走した部の先頭の友田謙三氏は、中村氏の場合には相當に感電もしたらうが、直接の致命傷は「まづ落雷の爲に朝田氏の足元の穴が掘れ、飛散する岩石の破片で強打され」たものらしいと主張した。

またここで、朝田氏の金齒を問題にする段になると、そのすぐ二米前方の松村氏が、僅かに一人、四者のうち唯一本のピツケルを所持してゐた、といふ問題をどう解決すればいいか。この遭難の報告を逐一讀んだ藤原咲平博士は、高商山岳部に寄せた書信の一節に「元來電氣現象は、非常に急速なる経過を取る爲に、百萬分の一秒程度の時差が、電流に於ては主流と支流の差ともなり、支流は數十又は數百分の一程度の弱流になるものかと存ぜられ候。位置が稍低かりし爲に、松村氏所持のピツケルも、その危険性が現はれざりし御様子にて、中村氏の倒れし方向及び位置

より見るも、主電流が全く、最高位置にありし朝田氏を襲ひたる事に相違なかるべしと存じ候」と、極めて率直な意見を吐かれてゐた。

四、水禍と中毒禍

「山へ登つて溺死する」と云ふと、事情に通じない多くの人々は頗る不審を打つが、山岳地帯の河水の渡渉と云ふ仕事は、なかなかむづかしいものである。だから一流登山家と雖も、これには渾身の努力を傾注する。尤も溺死と云つても色々あつて、たとへば一番古い所で昭和二年の八月一日、上高地を發つて槍ヶ岳へ向つた東京都立第一商業學校部隊、約五十名中に、三年生に福室順之助君（十八歳）といふ少年がゐて、一の俣の少し上部の丸木橋を渡るとき、そのまん中邊でひと休みをし、面白さうに行く水の姿を眺めてゐるうちに、中心を失つて河中に墜落、押流されて遭難したなどといふ事實もある。

この時の災難は、ただにこの少年のみにとどまらず、その部隊の引率者、教諭石井元先生（三十三歳）が、少年の後を追つてすぐ飛び込み、共に急流の中で犠牲の殉節を遂げて終つた。高山地帯の河水は、實に冷たいものであつて、夏でもまづ五分程度で、人間の心臓の鼓動を止めて終ふと云ふ。また昭和五年の七月十六日にも、北アルプスの餓鬼岳に登らうとした東京登山俱樂部